The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「旧朝鮮語学」と「戦後」の朝鮮語教育の断絶と連続性小攷 : 残された学習書を手掛かりとして（1945-1965）
Author(s)	植田, 晃次
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 47-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91568
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

研究ノート

「旧朝鮮語学」と「戦後」の朝鮮語教育の断絶と連続性小攷
―― 残された学習書を手掛かりとして(1945-1965) ――

植田　晃次

1. はじめに

近現代の日本における朝鮮語教育について、近年の朝鮮語教育の量的伸長とも相俟って、1945 年の敗戦以前は支配と抑圧のための朝鮮語教育、以降は友好・親善、交流・相互理解のための朝鮮語教育であるといった見方がある[1]。この点に関しては、「戦後」の早い時期から外務省や東京管区警察学校(関東管区警察学校)等で朝鮮語教育に当たった相場清(1886-1970)を例に「戦前」・「戦後」の朝鮮語教育の連続性について簡単に言及したことがある[2]。

外国語学習書(教科書やテキストを含む)は、「執筆者が学習者に教えよう／伝えようとするその言語そのものとともにそれにまつわる事柄が盛り込まれて編纂され、そこには無意識下のものを含め執筆・出版関係者の意識が反映されている」[3]と考えられる 。

本稿では、残された学習書を手掛かりとして、戦後、敗戦から日韓国交正常化までの間に日本人がいかに朝鮮語を学んだのかの一端を概覧したうえで、奥山仙三・相場清・梶井陟の 3 人を取りあげ、旧朝鮮語学(3. で後述)の学習書の戦後の学習書への流用という行為から旧朝鮮語学と戦後の朝鮮語教育の断絶と連続性について簡単に検討する[4]。

2. 戦後初期(1945～1965 年)の日本における朝鮮語学習書

ここでは敗戦によって植民地朝鮮が消滅した戦後日本において朝鮮語学習がどのように行われ始めたかを残された学習書を手掛かりとして見る。

まず、敗戦から日韓国交正常化まで(1945 年～1965 年)に発行されたものを対象とし、学習書の目録を提示する。

戦後現れた最初の学習書は『A First Book of Korean(英和対照朝鮮語入門)』(Lee Eun, Blyth

---

[1] 植田(2009:2)。以下、便宜上、本稿では第 2 次世界大戦での敗戦を境として「戦前」・「戦後」と呼ぶことがある。
[2] 植田(2009)
[3] 植田(2022b:44)
[4] 刊本の学習書は数冊のみという時代的特性を考慮し、本稿では謄写版の教科書類も学習書に含めて論ずる。なお、奥山の学習書からの相場・梶井の学習書への流用については植田(2009)で簡単に触れたことがあるが、本稿ではその後に見出した資料『韓語基礎会話　一、二、三』(朝鮮事情研究会、1953 年)について補い、さらに検討する。

R.H.、北星堂書店、1951 年)と見られる。しかし、同書は韓国駐屯国連軍のための入門書として英語で書かれたものであり[5]、日本語話者を対象とするものではないため、本稿の対象とはしがたい。また、辞書・単語集・規範に係るものなどや国外で発行されたものは除いた[6]。

本稿の執筆者の調査によれば、この時期に発行された学習書 23 冊が確認できた(表 1[7])。

番号	発行年	書名	執筆者	発行所	備考
[1]	1952(昭和 27)	朝鮮語入門	梶井陟	日朝協会	謄写版
[2]	1952(昭和 27)	朝鮮語文法読本	斉藤辰雄	天理大学朝鮮語学研究室	謄写版＊
[3]	1952(昭和 27)	現代朝鮮語文法概説	石原六三	天理大学朝鮮学科研究室	謄写版＊
[4]	1953(昭和 28)	基礎朝鮮語教科書 第 1 編(音声篇)	石原六三	天理大学朝鮮学科研究室	謄写版＊
[5]	1953(昭和 28)	基礎朝鮮語教科書 第 2 編(語法篇)	石原六三	天理大学朝鮮語学研究室	謄写版＊
[6]	1953(昭和 28)	韓語基礎会話　一、二、三[8]	朝鮮事情研究会	朝鮮事情研究会(代表者：相場清)	謄写版
[7]	1954(昭和 29)	新らしい朝鮮語の学習	宋枝学・梶井陟[9]	学友書房	
[8]	1955(昭和 30)	한글(総合韓語)	김해성	한글펴는데	謄写版？＊
[9]	1950 年代初	韓語講義　第一篇 文法篇	相場清	不詳	謄写版
[10]	1950 年代初	韓語講義　会話篇 下巻	相場清	不詳	謄写版
[11]	1950 年代初	韓語講義　職務篇	相場清・	不詳	謄写版

[5] 植田(2022b:45)

[6]『朝鮮語辞典』(朝鮮語研究会、快青社、1953 年)・『朝鮮語基礎 1500 語』(宋枝学、大学書林、1957 年)・『対訳日鮮漢字音辞典』(石原六三、天理大学朝鮮語学研究室、1952 年、謄写版)・『朝鮮語標準語集』(朝鮮語学会、国際少年団朝鮮総聯盟、1946 年) ・『韓日会話』(安吉保・斎藤辰雄、発行所不詳、1965 年)など。なお、『韓日会話』はソウルで発行された同著者・同書名の学習書(東方図書、1967 年)の前身もしくはそれに関連するものの可能性があるため国外発行のものとみなした。

[7] 本稿の執筆者の調査による基礎データに基づき作成した。基礎データは、以下のような手順で作成した(調査期間：2021 年 10 月 19 日～2022 年 6 月 28 日)。原則として、一部重複するが藤井(1993, 2008)・生越(1996)・山田(2006)のデータ、および、2006 年以降は主要な出版社・書店・図書館等のウェブサイトのデータからキーワード検索(朝鮮語、韓国語、ハングル、コリアン、コリア語、韓語、日韓、韓日)により検索したデータに基づき作成した。なお、基礎データ作成には川端映美氏の協力を得たが、誤りなどの責は植田にある。この基礎データは整理後に公開する予定である。23 冊中、原物を確認しえていないものは備考に＊を付した。

[8] 生越(1996)の No.1750 は発行者が海外事情研究会と異なっているものの、本書の可能性がある。

[9] 「はしがき」によれば、綴字発音篇・文章解釈篇を宋枝学が、文法篇・単語対訳集を梶井が主として扱ったという。

			橋本一天		
［12］	1950 年代初	韓語講義　附録　千字文―韓日音訓併記	不詳	不詳	謄写版
［13］	1954（昭和 29）？	朝鮮語講義　第一巻（朝鮮語　基礎会話篇（一））	相場清	不詳	謄写版
［14］	1956（昭和 31）？	朝鮮語　昭和三十一年度語学研修教材[10]	相場清	管理部人事課	謄写版
［15］	1957（昭和 32）	朝鮮語 1・2	青山秀夫	天理大学朝鮮学科研究室	謄写版＊
［16］	1957（昭和 32）	基礎朝鮮語	宋枝学	大学書林	
［17］	1957（昭和 32）	朝鮮語の初歩	卓熹銖	学友書房	
［18］	1958（昭和 33）	日朝会話練習帖	宋枝学	大学書林	
［19］	1962（昭和 37）	朝鮮語の学習[11]	石原六三・青山秀夫、	養徳社	
［20］	1963（昭和 38）	朝鮮語四週間	石原六三・青山秀夫	大学書林	河野六郎監修
［21］	1963（昭和 38）	한글교재	金思燁・塚本勲	大阪外国語大学	＊
［22］	1963（昭和 38）	朝鮮民話集	宋枝学・孫晋瀅	大学書林	
［23］	1964（昭和 39）	朝鮮語会話	金礼坤	朝鮮青年社	＊

表 1　朝鮮語学習書一覧（1945～1965 年）

次に 23 冊の学習書の類型を見る。まず、23 冊中およそ 3 分の 2 が謄写版であることが目に付く。また、［19］を含め、戦前から朝鮮語教育をほぼ途切れず継続してきた天理大学の教材が 23 冊中 6 冊[12]、1963 年に朝鮮語学科が開設された大阪外国語大学の教材と見られるものが 1 冊

[10] 藤井(1993)・生越(1996)には『朝鮮語』(相場清、1955 年)が挙げられている。CiNii・NDL では確認できないが(2023 年 5 月 21 付現在)、本書との錯誤、あるいは本書の前年度版の可能性がある。
[11] 1985 年には 8 版が発行されており、自序(1969 年 3 月付)で改訂した旨が述べられている。なお、個人蔵の 8 版は 1989 年 12 月 28 日に大阪・梅田の旭屋書店で販売されていたものであり、1989 年当時の大手書店の流通ルートにも乗っていたことがうかがわれる。
[12] 本稿は基礎データで確認できた現存する学習書を対象としたため 6 冊にとどまるが、他にも同種の教材類があった可能性がある。

というように大学の教材[13]、詳細は不詳ながら相場清が関係した警察関係等の講習教科書と見られるものが 7 冊見られる[14]。なお、宋枝学・卓熹銖・孫晋瀅・金礼坤[15]は在日朝鮮人団体に関係する／していく執筆者である点も指摘できる。

このような点から、大学や警察といった特定の機関での学習者を対象としたものではない最初の学習書は『朝鮮語入門』(梶井陟、日朝協会、1952 年、謄写版)と一旦みなして差し支えなかろう。とはいえ、同書も謄写版印刷の、限られた範囲で用いられたものと考えられる。梶井自身は本書の執筆動機について、「わたしの念頭にあったのは、都内一五校の朝鮮人学校に勤める一〇〇人ちょっとの日本人教師が、わたしの勉強の成果を少しでも役立ててくれればよいという」ことであったと回顧している[16]。

刊本としては、『新らしい朝鮮語の学習』(宋枝学・梶井陟、学友書房、1954 年)が挙げられるが、在日朝鮮人団体関連の出版社から刊行されたものであるという点で、広く日本社会に流通する可能性を持ったものとはいいがたい。不特定の学習者を対象とし、大手出版社から刊行された、広く社会に流通する刊本として戦後初の朝鮮語学習書と見なせるものは『基礎朝鮮語』(宋枝学、大学書林、1957 年)を待たねばならなかった[17]。さらに日本人が執筆した刊本としては、『朝鮮語四週間』(石原六三・青山秀夫〈河野六郎監修〉、大学書林、1963 年)まで戦後 18 年を要している[18]。

このように 1960 年代前半になって、語学書を専門とする出版社からではあるものの、一般書の 1 冊として刊行されるようになったとはいえ、一般に流通するものはかろうじて数冊のみという朝鮮語学習書のいわば空白期が続いた。さらには、ようやく旅行会話を扱う『六カ国語会話 3』[19](日本交通公社)・『韓国語旅行会話 3 時間』(張曉、三修社)が世に出るのは日韓国交正常化の 5 年後、戦後 25 年を経た 1970 年である[20]。

3. 旧朝鮮語学と 1945 年以降の朝鮮語学習書の関係(1):奥山仙三・相場清・梶井陟の人物史

旧朝鮮語学とは、矢野謙一よって提唱された概念であり、明治維新以降の「朝鮮語の運用を目的とする朝鮮語学」を指し、主に「口頭での意思疎通のための知識と朝鮮文を書くための知

---

13 天理大学とその前身での朝鮮語教育については、平木(2018)・植田(2007:16-17)[執筆は石川遼子]、植田(2007:36)[執筆は植田晃次]参照。なお、平木(2018:129)は 1960 年度の『学科目講義便覧』を示しつつ、「この時期の教材は[中略]語学教材は市販の教材もなく、謄写版刷りのプリント教材が使用された。」と述べている。

14 書誌等の詳細については、植田(2009)参照。

15 経歴は植田(2007:95)・梶井(1974:48)・『조선신보』2017 年 4 月 14 日付(3)・金禮坤(2021:著者)参照。

16 梶井 (1974:54-55)

17 本書発行の 5 か月後には『朝鮮語の初歩』(卓熹銖、学友書房、1957 年)が発行されるが、『新らしい朝鮮語の学習』と同様に出版社の性質から広く流通する可能性を持ったものとはいいがたい。

18 本書の執筆者 2 人も天理大学の教員である。これらの学習書の一部については、植田(2007:84-85)参照。

19 日・英・中・広東・タイ語とともに韓国語が収録されている。

20 『日朝会話練習帖』(宋枝学、大学書林、1958 年)がつとに発行されてはいるものの、旅行の項目で「아오모리행의 기차는 어느 홈에서 떠납니까?／青森行の汽車はどのプラットホームから出ますか。」(24-25 頁、朝鮮語はママ)といった類の例文が挙げられているように、おおむね日本を舞台として朝鮮語を用いることが想定されているようである(1968 年 4 月 30 日発行 第 14 版による)。

識」から成るものであった[21]。これは「朝鮮語の性質を究明しようとする朝鮮語研究」とは明確に区別されるものであった。そしてその教材については、日清戦争前の時期は『交隣須知』を中心に特徴づけられ、『韓語入門』・『日韓善隣通語』（ともに宝迫繁勝[22]）・『交隣須知』（外務省蔵版）・『訂正隣語大方』（外務省蔵版）・『林慶業伝』（外務省蔵版）などが、一部を除きそれ以降も教材として用いられた。明治維新以降、敗戦までの時期に発行された学習書として、『韓語入門』（宝迫繁勝、1880 年）から『朝鮮語教科書』（朝鮮総督府警察官講習所、1943 年）まで 144 冊の存在が確認されている[23]。

本稿冒頭で述べたように、戦前と戦後の朝鮮語学習は性質を異にするという見方がある。また、「その［植田註：旧朝鮮語学の］研究は日本人の朝鮮語学習のために蓄積された知識であるのにも拘わらず、戦後は継承されなかった。これは 1965 年の日韓国交正常化後も変化はない。」とも指摘されている[24]。確かにこれらの指摘はおおむね的を射ていると思われる。しかし、学習書の持つ書き手（や教え手）と学び手の媒介となるという性質を見たとき、ことに本稿が対象とするような、いわば学習書の空白期には、（たとえ執筆者自身の没後でさえ）その内容は残って利用されることがあるため、継承とは言えぬまでも、単純に断絶しているとは言いがたい側面もあるであろう。

その前提として、本稿の対象時期は先述のように朝鮮語学習書（や辞書）が整備されていない、いわば空白期にあたる。このような時期には、学習者は好むと好まざるとに拘わらず、あるものを利用せざるを得ない[25]ことが挙げられよう。さらに、学習書編纂にあたって、自著を含め既存の学習書（や講義内容）を流用・使い回しして編纂するという行為が旧朝鮮語学で見られた[26]ことを挙げることができる。

---

21 本段落の記述は矢野(2012:297-298)に基づく。

22 生没年は 1851 または 1852？-1896 年秋(嘉永 4 または 5？-明治 29 年秋)である。山口出身、明治維新以降初めて朝鮮語学習書を著し刊行した人物であり、対馬出身者ではなく朝鮮語と関連して名が残った当時の人物である点が特筆される。なお、生年は植田(2010)、没年は塚田菅彦(1896)「権少教正宝迫繁勝ぬしの長逝を悼む辞」『教林』42(教林社)による。

23 植田(2007:127-131)所収「朝鮮語学習書目録(1880～1945 年)」(執筆：山田寛人)。本稿の執筆者の原物主義による調査によれば、ここに収録されていない学習書が複数あることがわかっている。これについては、別途報告の予定である。

24 矢野(2012:297)

25 例えば、青山（1986）は 1947 年当時に『朝鮮語辞典』（朝鮮総督府）や『和鮮辞典』（朝鮮語研究会）を、梶井（1986）は 1950 年頃に『日鮮単語対訳集』（朝鮮語研究会）を、菅野（――）は「高校生になってから［植田註：1950 年代初を指すと思われる］買った」『朝鮮語研究』（山本正誠）や “A First Book of Korean”（Lee Eun and R. H. Blyth）を利用したと述べている。また、油谷（2009：683）でも、『基礎朝鮮語』（宋枝学）の内容に触れつつ、同書と『朝鮮語四週間』（石原六三・青山秀夫）を利用せざるを得なかったと 1970 年代初の状況を述べている。現代でもいわゆる「マイナー言語」について同様の状況が見られるだろう。このような点や朝鮮語学習書が書店に溢れる現在の状況と対比からも、学習書はその言語と当該社会との関係を映し出す鏡のような存在であると言えよう。なお、『和鮮辞典』は『鮮和新辞典』、梶井（1974：49）の『日韓対語対訳集』は上述の『日鮮単語対訳集』が正しい書名だと思われる。

26 薬師寺知曨・金島苔水・弓場重栄・島井浩などの学習書がその例であるのみならず、この行為は国外にも及んでいた（植田 2011, 2014, 2021, 2022a, 2023 参照）。さらに、逆にロシア・東洋学院のスパルヴィンによる日本語学習書を国内のロシア語学習書に「参考した」例も見られる（矢野 1919；1929[10]「緒言」参照）。なお、このような行為は現代では非倫理的であるが、それを単純に現代の倫理観で批判することは慎まなければならないであろう。

このような状況を念頭に、ここでは奥山仙三・相場清・梶井陟の 3 人を取りあげ、旧朝鮮語学の学習書の戦後の朝鮮語学習書への流用という行為から旧朝鮮語学と戦後の朝鮮語教育の断絶と連続性について検討するのに先立って、この 3 人の人物史を概観する。

奥山仙三は旧朝鮮語学で朝鮮語を学び、教えた人物、相場清は旧朝鮮語学で朝鮮語を学び、戦後に教えた人物、梶井陟は戦後に朝鮮語を学び、教えた人物である。

奥山仙三(1889–?/明治 22–？[27])は次のような経歴を持つ[28]。秋田出身、東京外国語学校朝鮮語学科を卒業した後、朝鮮総督府の学務畑の官吏として勤める中、普通学校教員の講習会や京城医学専門学校・京城高等商業学校などで朝鮮語を教える。退官後、総督府の嘱託として働き、国民精神総動員朝鮮連盟(のち国民総力朝鮮連盟)でも役員を務める。この間、『朝鮮語法及会話書』(朝鮮総督府、1917 年)[29]とそれを基にした『語法会話朝鮮語大成』(朝鮮教育会、1928 年、および日韓書房、1929 年)を著す。

相場清(1886–1970/明治 19–昭和 45)は次のような経歴を持つ[30]。熊本出身、熊本県派遣留学生として大韓帝国に渡り朝鮮語を学ぶ。戦前は春川での顧問警察の通訳官を振り出しに朝鮮や中国東北部で通訳官・翻訳官・調査官・警視・警察署長などを務めた後、外務省理事官となる等、一貫して外務・警察・治安維持関係の道を歩んだ。戦後は外務省や東京管区警察学校(1954 年に関東管区警察学校と改称)[31]で朝鮮語を教えた。また、崔南善の『朝鮮常識問答』(日韓親和会発行と宗高書房発行があり、ともに 1965 年)の訳者として知られるように「朝鮮文化研究家」等の自称・他称の肩書でも翻訳・出版を行うほか、朝鮮関係の文章を著した。公刊された朝鮮語学習書はないが、『韓語基礎会話』[32]・『韓語講義』・『朝鮮語講義』・『朝鮮語』といった、朝鮮語教育に携わった機関内の教材 4 タイトル 7 冊が現存している(前掲表 1)。

梶井陟(1927–1988/昭和 2–昭和 63)は次のような経歴を持つ[33]。東京出身、東京第一師範学校生物科を卒業[34]、中学校の理科の教員となった。1950 年から 1955 年の間、公立に移管された東京都立朝鮮人学校[35]に勤める際、朝鮮語も知らずに朝鮮人を教えられると思うのかと生徒に問

---

27 生年は朝鮮新聞社編纂(1922:196)による。

28 本段落は植田(2016)による。その他によった点は注記する。写真が『京城日報』1929 年 12 月 10 日付(3)「名課長奥山仙三氏退官を惜まる」にある。

29 奥山の名ではなく朝鮮総督府名義での出版。

30 本段落は植田(2009)による。その他によった点は注記する。写真が相場清訳・解(1971)の巻頭にある。

31 植田(2009:8)で警察大学校としたのは誤りであり、東京管区警察学校(関東管区警察学校)が正しいと思われる(植田 2013:102)。関東管区警察学校史編集委員会(1972:335-336, 395-396)によれば、同校では 1950 年 5 月 15 日に外語特科(朝鮮語)が開始され、相場が 1951 年 5 月から朝鮮語専科の講師となり 1967 年末まで勤務した。

32 編著者の名は明示されていないが、表紙の右上に相場と見えることや、奥付に編集兼発行者として書かれた朝鮮事情研究会の代表者が相場であることから相場の編著書であると判断した。

33 本段落は植田(2007:72-73)[執筆は三ツ井崇]による。その他によった点は注記する。写真が藤本(1988)にある。

34 梶井(1974)の著者略歴。

35 同校については、『朝鮮人学校の日本人教師』(日本朝鮮研究所、1966 年、亜紀書房、1974 年、岩波書店、2014 年[『都立朝鮮人学校の日本人教師』に改題])参照。なお、亜紀書房版では改訂増補がなされている。

われたことをきっかけに朝鮮語をほぼ独学で速習した[36]。「平和擁護運動」[37]や朝鮮人学校存続運動といった社会運動や組合活動にも取り組んだ。その後も中学校教員の傍ら朝鮮文学の研究を行い、執筆活動の他、朝鮮語学習サークル・大学の講師も務めた。1978 年には富山大学人文学部教授となり大学での研究・教育に携わった。朝鮮語学習書としてはまず『朝鮮語入門』(日朝協会、1952 年、謄写版)[38]を著している。続いて、『新らしい朝鮮語の学習』(学友書房、1954 年、宋枝学との共著)、『わかる朝鮮語〈基礎・実力編〉』(三省堂、1971 年[39])がある。また、『朝鮮語を考える』(龍溪書舎、1980 年[40])に代表されるように、日本人にとっての朝鮮語の意味を問い続けた。

この 3 人、ことに戦後の同時期に朝鮮語学習書を編んだ相場と梶井は朝鮮語に対し全く異なる関わりや社会的立場にあったことになる。

4. 旧朝鮮語学と 1945 年以降の朝鮮語学習書の関係(2):奥山仙三・相場清・梶井陟の学習書

次に、3 人の朝鮮語学習書を旧朝鮮語学の学習書から戦後の学習書への流用という視点から見てみよう[41]。

植田(2009)では、奥山の『語法会話朝鮮語大成』と相場の『韓語講義　第一篇　文法篇』の関係について、「もちろん文言の加減等はあるが，基本的に『語法会話朝鮮語大成』を下敷きにして,『韓語講義　第一篇　文法篇』の多くの部分は執筆されている。説明・例などがそのまま引き写されている部分が多い。／また,『韓語講義　附録　千字文』についても，同様のことが言える(例えば,「はしがきと凡例」の一～三は『語法会話朝鮮語大成』(日韓書房版)15 頁の記述と類似している。)。」、「第二章以降の内容は奥山仙三『語法会話朝鮮語大成』の第一編(語法)の第二章(名詞)～第十章(接続語と接尾語)を踏襲したものであり」と指摘し、前者を引き写して後者が編纂されたことを明らかにした[42]。

本稿ではさらに、奥山の『語法会話朝鮮語大成』と相場の『韓語基礎会話　一、二、三』の関係について見てみる。後者は 3 巻が 1 冊にまとめられている。第 1 巻(第 1 課～第 50 課)では、短文によるやり取りによって課ごとに表現別に朝鮮語を提示したり、数詞・月の呼び方な

---

36 梶井(1974:49-51)を見る限り、朝鮮語ができない生徒のために設けられた「講習会にもぐり込ん」だりしてはいたものの、事実上、独習であったとみなしてよいだろう。また、勤務校で日本人教師のための朝鮮語講習会も開かれたが、参加者が顔を出さなくなり「三日坊主」になったとも回顧している。

37 林光澈「この著者はわれわれに何を教えるか？」(『朝鮮語入門』巻頭。同書のガリ切りされた文字では徹と見えるが澈が正しいと思われる)。

38 梶井(1974:51-59)では、本書の執筆・出版の経緯が明かされており、「朝鮮語を勉強しだし」てから「約一年八カ月で出版したことになる。ずいぶん乱暴な話である。」と回顧している。

39 1982 年に基礎編・実力編を分冊化し第 2 版発行。

40 1984 年に改訂版発行。

41 『語法会話朝鮮語大成』(日韓書房、1929 年初版)・『朝鮮語入門』(日朝協会、1952 年)は個人蔵、『韓語基礎会話　一、二、三』(朝鮮事情研究会、1953 年)は富山大学蔵(梶井文庫)のものを用いた。なお、『韓語基礎会話　一、二、三』には多数の書き込みがあるほか、表紙中央下には多久と書かれており、多久安貞のものが梶井の手に渡ったものである可能性がある。

42 このほか、『語法会話朝鮮語大成』15－16 頁と『韓語講義　第一篇　文法篇』31 頁の名詞に関する記述が酷似していることも述べた。

どの語句をまとめて提示している。第 2 巻(第 51 課～第 75 課)・第 3 巻では各課にタイトルを付け[43]、それに関する対話を第 1 巻よりやや長い文により提示している[44]。発音の変化や文法の説明はほとんど示されず、例文を通して朝鮮語を習得させようとするといった点で旧朝鮮語学の学習書を彷彿とさせる。

『韓語基礎会話　一、二、三』の第 67 課「植木」の全文(61-62 頁)と『語法会話朝鮮語大成』の第二編会話の第 16 節「樹木」(277－283 頁)の間での流用の一端を示したものが表 2 である[45]。「箇所」の列の韓は『韓語基礎会話　一、二、三』、朝は『語法会話朝鮮語大成』を指し、朝の後の数字は例文に付された通し番号を指す。

箇所	例文
韓	조선은 이전부터 붉은산이 많았읍니까
朝 1	됴선의 산은、이젼부터、쟈산독봉이、만엇습닛가
韓	그렇지 않다 합이[ママ]다 이전에는 어떤 산에든지 나무가 울창 하였답니다
朝 2	그럿치아니하얏다합니다、이왕에는、엇던산이든지、나무가、울々창々하얏다합니다
韓	그런데 지금은 저와같이 토피가 벗어젔[ママ]습니다구려
朝 4	그런대、지금은、저와갓치、토피가、버섯소구려
韓	백성들이 함부로 베기만하고 심지 아니 한 까닭이올시다
朝 5	빅셩들이、함부로、베히기만하고、심지는、아니한까닭이올시다
韓	요새도 매년 봄에는 식목을 합니다
朝 9	요마젹도、ᄆᆡ년、ᄉᆞ월삼일에는、식목을합닛가
韓	그날은 식수날이라 하여 학교생도는 물론이요 각관청에서도 직원들이 식목을 합니다
朝 10	학교ᄉᆡᆼ도는、물론이요、각관공셔에서도、직원일동이、이날에는、식슈를합니다
韓	흔히 어떤 나무를 많이 심습니까
朝 14	흔히、엇더한、나무를만히심읍닛가
韓	소나무를 심으라고 장려 합니다

[43] 第 2 巻(以下、課数を数字で表す) 51.写真館で、52. 問路、53. 雑貨店で、54. 時計店で、55. 問病、56. 火災慰問、57. 朝の挨拶、58. 夕方の挨拶、59. 旅館で、60. 初対面の挨拶、61. 新年の挨拶、62. 昼食、63. ホテルで、64. 百貨店で、65. 停車場で、66. 邑内、67. 植木、68. 農事、69. 時間、70. 婚姻、71. 音楽会、72. 葬事、73. 朝、74. 裁縫所、75. 朝鮮服、第 3 巻 76. 春、77. 夏、78. 秋、79. 冬、80. 接待、81. 卒業祝賀、82. 遠足、83. 訪問、84. 汽車旅行、85. 告別、86. 長上尋訪、87. 食口(一)、88. 食口(二)、89. 食口(三)、90. 食口(四)、91. 就職依頼、92. 金銭借用、93. 迎接、94. 餞送、95. 万物相行、96. 九龍渕行、97. 名節、98. 仁川行、99. 端午、100. 送別の挨拶(なお、79 課は 78 課と誤記されており、78 課が 2 つある)

[44] 巻の間の頁には、東国文献備考からの訓民正音に関する部分の引用、金笠の詩、눈사람という詩、「立春々祝之対句、対聯」などが挿入されている。

[45] 本稿では以下、『韓語基礎会話　一、二、三』で漢字語の左下に付された漢字、『語法会話朝鮮語大成』で「高字」(長母音)を示す「：」、欄外註を示す＊、ルビ・日本語訳は略した。

朝15	소나무를심으라고、쟝려합니다
韓	소나무는 여러가지 종류가 있지요
朝16	소나무(솔)는、여러가지、죵류가잇지요
韓	적송 흑송이 있는데 조선에는 흑송은 그렇게 많지 않고 다만 해안지방에 좀 있읍니다
朝17	젹숑、흑숑이잇는대、됴션셔는、다、솔이라고합니다

表2　『韓語基礎会話一、二、三』と『語法会話朝鮮語大成』での流用の例

第二編会話の第16節「樹木」には58の例文があり通し番号を振っている。『韓語基礎会話一、二、三』では、そこから1・2・4・5・9・10・14～17の例文10文を抜粋し、若干手を加えてはいるもののほぼそのまま流用していることがわかる[46]。紙幅の制限のため実例は省略するが、同様の流用は第69課「時間」・第72課「葬事」などでも見られる[47]。

ここでは相場が奥山の例文を流用するのみならず、場面設定などの発想をも「借りている」ことがわかる。

植田(2009)ではさらに、『語法会話朝鮮語大成』と梶井の『朝鮮語入門』の関係について、梶井(1952 : 3)が執筆時に特に参考としたものとして『語法会話朝鮮語大成』を挙げて読者にも勧めていること、『語法会話朝鮮語大成』から引き写した、もしくは参考・改作したと思しき例文等が散見されることを指摘し、該当箇所のみを簡単に挙げた[48]。その一部の実例を示せば表3のとおりである。

『語法会話朝鮮語大成』(17頁)[49]	『朝鮮語入門』(32～33頁)
一、語根に「ㅁ」を附するもの	語幹にㅁをつけるもの
자　(眠る)……잠　(睡眠)	자다(眠る) ⟶ 잠(睡眠)
지　(負ふ)……짐　(荷物)	지다(負ふ) ⟶ 짐(荷物)
추　(踊る)……춤　(踊り)	그리다(描く) ⟶ 그림(絵)
니르　(称ふ)……니름　(名称)	싸우다(戦ふ) ⟶ 싸움(戦)
그리　(描く)……그림　(絵画)	다르(違ふ) ⟶ 다름(相違)
다르　(違ふ)……다름　(相違)	「이」或は「ㄱ」[ママ]をつけるもの
셰　(数ふ)……셈　(勘定)	크다(大きい) ⟶ 크기(大きさ)
싸호　(争ふ)……싸홈　(争闘)	길다(長い) ⟶ 길이(長さ)
수　(息する)……숨　(呼吸)	깊다(深い) ⟶ 깊이(深さ)

46 綴字法・句読点・分かち書きなどの違いは本稿の趣旨からここでは問題としない。
47 この他、『韓語講義　会話篇　下巻』の第10章俚諺も『語法会話朝鮮語大成』の第2編会話の第22節俚諺からほとんど流用されている。
48 例えば、『語法会話朝鮮語大成』と『朝鮮語入門』のそれぞれ17頁と32-33頁、34頁と37頁、39頁と41頁、90頁と79頁などである。
49 行間の空きは詰めて示す。

꾸　(夢みる)……꿈　(夢) 二、語根に기を附するもの 살　(活きる)……살기　(生活) 보　(見る)……보기　(見かけ、外貌) ᄒᆞ　(為る)……ᄒᆞ기　(為ること) 크　(大きい)……크기　(大きさ) 길　(長い)……길기　(長さ) 높　(高い)……높기　(高さ) 깊　(深い)……깊기　(深さ) 三、語根에、ᄀᆡ、ᄋᆡ等を附するもの 넓　(広い)……넓이　(広さ、幅) 길　(長い)……길이　(長さ、縦) 지　(担ふ)……지ᄀᆡ　(担機) 베　(枕する)……베ᄀᆡ　(枕) 막　(塞ぐ)……막ᄋᆡ　(栓)	높다(高い) ──────→ 높이(高さ)

表 3　『語法会話朝鮮語大成』と『朝鮮語入門』での流用の例

両者を対比すれば、用言の名詞化について『朝鮮語入門』では、文法を再整理したうえで例を大幅に絞っているものの、『語法会話朝鮮語大成』を参考にしつつ編纂された形跡が見える。

5. おわりに

旧朝鮮語学と「戦後」の朝鮮語学習は、1960 年代前半までのいわば学習書の空白期を挟み、断絶しているように見えるが、上で見たような点で学習書を媒介として連続性も見られる部分もあるといえよう。

相場は旧朝鮮語学の奥山の朝鮮語を奥山の学習書から流用して自身の学習書を編んで、当時、警察官等に朝鮮語を教えた。その流用は植田(2009)で見た文法や千字文のみならず、本稿で見たように、会話の例文や場面設定などの発想にも及ぶ広いものであった。また、植田(2009)で指摘した梶井の学習書に見られる奥山からの流用と見られる部分についても本稿でより具体的に示した。

先に見たように、相場と梶井は朝鮮語に対し全く異なる関わりや社会的立場にあり、それぞれ異なった場で戦後に朝鮮語を教えた。しかし、当時のような学習書の空白期には、朝鮮語との関わりや立場の違いを問わず、利用できるものを利用できるようにして朝鮮語教育が行われていた。そこではそれらの違いに拘わらず、旧朝鮮語学の成果が流用されていた。そしてその基盤の１つとして、旧朝鮮語学の学習書である奥山の『語法会話朝鮮語大成』があった。これを図示すれば図１のようになる。ここでは警察官と教員のみ示したが、その他の学習者も図に含むことができるであろう。

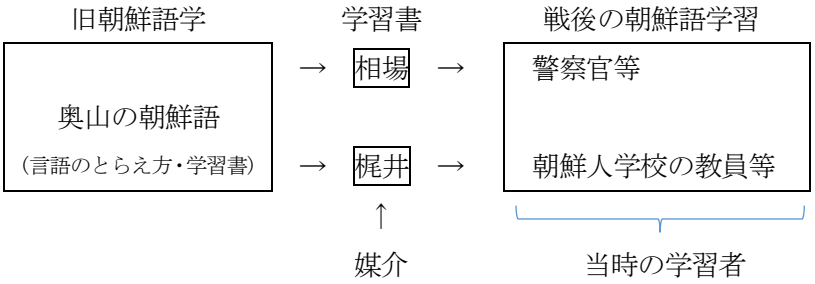

図１　相場と梶井の学習書による旧朝鮮語学の媒介の概念図

このように、旧朝鮮語学の学習書の戦後の朝鮮語学習書への流用という点から見れば、旧朝鮮語学が相場と梶井の学習書を媒介として、朝鮮語との関わりや立場の相違を越え、戦後の朝鮮語学習者の朝鮮語学習を「手助け」することになったという点で、旧朝鮮語学と戦後の朝鮮語教育にわずかながら連続性が見出せよう[50]。

引用文献

相場清 訳・解(1971)『韓国俚諺集』日韓親和会

青山秀夫(1986)「私と朝鮮語」大阪外国語大学朝鮮語研究室『朝鮮語大辞典(上巻)』角川書店

植田晃次(2007)『研究成果報告書　日本近現代朝鮮語教育史』植田晃次

植田晃次(2009)「日本近現代朝鮮語教育史と相場清」『言語文化研究』35、大阪大学

植田晃次(2010)「宝迫繁勝の経歴と活動」(第 61 回朝鮮学会大会口頭発表配布資料)

植田晃次(2011)「薬師寺知曨」『言語文化研究』37、大阪大学

植田晃次(2013)「朝鮮総督府『朝鮮語辞典』の書誌学的研究」『言語文化学』22、大阪大学言語文化学会

植田晃次(2014)「金島苔水とその著書」『日本语言文化研究』3(上)、延边大学出版社

植田晃次(2016)「奥山仙三と朝鮮語」『日本语言文化研究』4(上)、延边大学出版社

植田晃次(2021)「銀行員・弓場重栄と朝鮮語」『言語文化研究』47、大阪大学

植田晃次(2022a)「旧朝鮮語学の国外への影響」『言語文化研究』48、大阪大学

植田晃次(2022b)「朝鮮語テキストの言語呼称小攷」『批判的社会言語学の深化(言語文化共同研究プロジェクト 2021)』大阪大学大学院言語文化研究科

植田晃次(2023)「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た島井浩と朝鮮語」『言語文化研究』49、大阪大学

[50] 梶井(1974:262−263)は「かつて『朝鮮語入門』を書いた時に、植民地時代に『朝鮮語大成』という非常にくわしく実用的な学習書を出された清水兵三さんという人が、親切に意見をよせてくださったが、どちらかというと引っ込み思案なわたしは、丁重に礼状を書いただけでついに接触の機会を失ってしまった。」と述べている。金廣植(2020:240-247)によれば、清水は 1890 年生まれ、東京外国語学校朝鮮語科を卒業し、総督府に勤める傍ら民俗学に関する論考を発表した人物である 。没年は 1965 年であるため、『朝鮮語入門』発行時には存命であるが、管見の限りでは、朝鮮語学習書は著していないと見られる。本稿で取り上げたように、『朝鮮語大成』は奥山の著書である。この回顧からは手紙の送り主が奥山なのか清水なのかはわからないが、これがもし人名の錯誤であるなら、奥山と梶井に直接の接点がわずかにあったことになる。

［生越直樹］(1996)『朝鮮語研究(朝鮮語母語話者に対する日本語教育)文献目録－国内文献及び欧米文献－(1945～1993)』国立国語研究所日本語教育センター・第四研究室
梶井陟(1952)『朝鮮語入門』日朝協会
梶井陟(1974)『朝鮮人学校の日本人教師』亜紀書房
梶井陟(1986)「わたしの朝鮮語学習体験」大阪外国語大学朝鮮語研究室『朝鮮語大辞典(上巻)』角川書店
関東管区警察学校史編集委員会(1972)`『関東管区警察学校史』関東管区警察学校
金廣植(2020)『韓国・朝鮮説話額の形成と展開』勉誠出版　＊朝鮮名は日本漢字音により配列した。
金禮坤(2021)『韓国語講座』朝日出版社
朝鮮新聞社編纂(1922)『朝鮮人事興信録』朝鮮新聞社(芳賀登他編集『日本人物情報大系 73　朝鮮編　3』皓星社、2001 年の影印本による)
平木實(2018)『天理外国語学校・天理語学専門学校・天理大学における韓国・朝鮮学(Koreanology)の展開』新踏社(印刷・製本)
藤井幸之助(1993)「日本語母語話者のための朝鮮語学習用教材・関連図書目録」『阪南論集 人文・自然科学編』29(1)、阪南大学学会
藤井幸之助(2008)「朝鮮語＝韓国語教育のための文献リスト」野間秀樹 編著『韓国語教育論講座』第 4 巻、くろしお出版
藤本幸夫(1988)「梶井先生を悼む」『朝鮮学報』129、朝鮮学会
矢野謙一(2012)「日本における旧朝鮮語学」『日本语言文化研究』2(上)、延边大学出版社
矢野太郎(1919:1920[10])『新々日露会話』大阪屋号書店
山田寛人(2006)「朝鮮語学習書目録(1880～1945 年)(訂正増補版)」『報告書(1)朝鮮語教育史人物情報資料集』植田晃次　［山田寛人(2004)『植民朝鮮における朝鮮語奨励政策』不二出版所収の「朝鮮語学習書目録」の訂正増補版］
油谷幸利(2009)「韓国語研究と私」油谷幸利先生還暦記念論文集刊行委員会『朝鮮半島のことばと社会』明石書店
〈ウェブサイト〉
菅野裕臣(――)「菅野裕臣の Aŭtobiografio I)大学入学以前」百孫朝鮮語学談義
http://www.han-lab.gr.jp/~kanno/cgi-bin/hr.cgi?autobio/autobio-1.html　(2023 年 5 月 21 日最終接続)

付記：本稿は JSPS 科学研究費・基盤研究(B)「異文化理解における外国語教科書の役割－中国語・ロシア語・朝鮮語を対象として－」(課題番号:19H01282、研究代表者:王周明大阪大学准教授)による成果のひとつである。また，旧朝鮮語学関連の事柄については、科研費 18K00782、および 17320085・20320081・23520671・26370726　で得た知見も含んでいる。
なお、現在では不適切とされる語句も歴史的経緯から当時の表現を用いた場合がある。